

連城三紀彦

落日の門

新潮社

落日の門

落日の門らくじつもん

価格はカバーに表示してあります。

一九九三年四月二〇日 発行

著者 連城三紀彦れんじょう みき ひと

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 営業〇三(三三六)五一一
編集〇三(三三六)五四一一
振替 東京四一八〇八千一六二
印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Mikihiko Renjo 1993, Printed in Japan

ISBN4-10-347505-6 C0093

落日の門*目次

落日の門 5

残菊 67

夕かげろう 121

家路 169

火の密通 209

装帧
新潮社装帧室

落日の門

落日の門

今夜、時代は変わる……

一つの時代が終わり、新しい一つの時代が始まる……少なくとも今から訪れようとしている夜が真冬の深い闇で町を閉ざし、その闇が暁を告げる茜色あかねの空に破られる時刻までには……

暁。だが、明日の夜明けの空は本当に茜色に染まるのだろうか。

今、夕暮れのこの時、空は鉛色の鎧よろいでもまとったように重く冷えている。今夜は雪になるのかもしれない……それも動乱の夜にふさわしい白い嵐にも似た豪雪がこの東京に荒れ狂うとしたら、明日の空は暁の色に美しく燃えあがることもなく、天の怒りと慟哭どうくが地上へと溢れ落ちたかのような激しさで、雪はこの東京を切り刻み続けるだろう……この東京に夜明けは訪れないだろう……

俺は何を考えているのだ。あいつらが失敗し、東京ばかりでなくこの国に永遠に夜明けが訪れないことを望んでいるのか……四日前まではあいつらと固く手を握り、この国の空に暁の鐘が響きわたり、美しい日の出の色とともに新時代が訪れるのを夢見続けていたこの俺が……今、夕暮

れのこの時、今夜にでも事が決行されようとしているその間際になって、あいつらが失敗し、この国の夜が永久に門を開くこともなく、多くの民が飢えに泣き貧しさに苦しみ、重圧に喘ぎ続けるのを望んでしまっているというのか。

あいつらが計画を決行しなければ、今、政治と時代とを牛耳っている閣僚たちの腐敗した手にこの国を託し続けなければならないというのに。大臣の椅子にあぐらをかき、下界を見おろすようにしか民を見ようとしないう連中の汚れきった手がこの国の未来を握りつぶすのをただ黙って待っているしかないというのに……あいつらが今夜それを決行しなければ……

あいつら？ 四日前までは「我々」と呼んでいた者たちを今の俺は「あいつら」と呼んでいる……憎しみと蔑みをこめて。

だが、それも仕方がなかったのだ。

非が俺にあったわけではない。時機が熟し決行の日も迫った四日前、突如、あいつらの方から俺を見棄てたのだから……去年の末から談合のたびに固くなっていた同志としての絆をあいっらの方から、軍刀でも振りおろすようにきっぱりと断ち切ったのだから……裏切り者でも追放するかのように突如、この俺を計画の外へと弾きだしたのだから……

事実、安田は俺を「裏切り者」と呼んだ。

四日前、決起の日を何日後にするか決めるために、我々は安田の家に集合した。

安田は、約束の時刻より十分遅れて到着した俺を玄関先で笑って迎え入れたのだが、家人の耳の届かない奥座敷に俺が座ると同時に、不意に顔も声も暗くして、「今夜の話し合いは中止した

方がよさそうだ。この中に裏切り者が一人いる」そう言い出したのだった。集まっていたのは安田と俺をふくめて六人だったが、安田以外の五人がいっせいに顔色を変えた……もちろん俺も。安田はその一人一人の顔をゆっくりと見まわし、俺の顔まで来ると視線をとめた。家人を欺くためだったのだろう、安田は父親の形見だという渋色の結城を着て、ひどくくつろいだ様子だったのだが、俺を見つめたその目はいつもの軍服姿の目だった。

あいつは軍服を脱いでいる時は七、八歳の子供みたいな幼い純朴な目をしているが、軍服姿になるとその目が軍帽の廂に隠れて、別人のような冷厳さを帯びる。

死んだ父親の軍人としての血を受け継いだ目だった。

その目で俺を見ていた。

だが俺はその目よりもついさっき玄関で見せた笑顔の方をまだ信じていたから、

「この中に桂木と通じている男が一人いるんだ」

と言われてもそれが俺のことだとはわからなかった。桂木というのが今度の襲撃目標の一人である大臣の桂木謙太郎だということは即座にわかったのだが……俺は安田が俺のことを言っているのではないと考え、裏切り者は誰だろうと思いつながら他の連中の顔を見た。

皆が俺を見ていた。安田が言った。

「村橋……何故、桂木の娘と逢っていることを俺たちに隠していた」

俺は目を伏せた。すぐには返答の言葉が思いつかなかったし、安田の告発の声は俺にその機会も与えなかった。

「少なくとも三度逢っていることはわかってるんだ。一月半ばに帝国ホテルの食堂で一一緒に食事をしてるし、その場には桂木綾子の母親、つまり今の桂木謙太郎夫人も同席している……一月末には綾子は女友達を連れてお前の下宿を訪ねているし、今月に入ってから一度、一人でお前の部屋にあがっている……」

初めて聞く安田の怒りの声だった。安田と俺とは士官学校時代からの親友で、今度の計画でも同志というより友人として手を繋ぎあつてきたのだ。俺はうなだれてその声を聞いていた……畳に伸びた安田の影が俺の膝もとまで迫っていた。沈黙はその座敷の夜気を冷えた石のように固めていた……火鉢の中で炭が小さな音で爆ぜた。誰かが意味もなく火箸で炭をつついた。俺はうなだれたまま、「三度ではない、七度だ」と言った。

俺は体を細かく震わせていたのに、口から流れだしたその声は自分でも信じられないほど落ちて着いていた。

安田の肩の影が俺の膝を飲みこんだ。俺はゆっくりと顔をあげ、俺に殴りかかろうとするかのように身を乗りだした安田を見た。俺は静かな声のままでさらに、「桂木綾子と縁談の話が進んでいる」と言った。

「何故、それを俺たちに隠していた」

怒鳴りかけ、家人の耳があることを思いだしたのだろう、安田は慌てて声を低く潰した。

「それより俺の方からも訊きたいことがある……いつ、お前はそれを知ったんだ」

「お前が桂木綾子と帝国ホテルで逢っている時、保子が偶然あのホテルにいた」

「奥さんが……」

安田は肯いた。「それで俺に不審を抱いて俺のことを調べたわけだな」俺はそう訊いた。その言葉より俺は安田を凝視した目で問うていた。安田も無言の目が返答だった。

「調べる前に何故、俺に直接に訊かなかった？　そうすれば俺は答えただろう、正直に。桂木の娘と逢っていることも、縁談話が進んでいることも……そう、直接に訊いてくれれば良かった。大事を前にした体で、貴重な時間を無駄にする必要はなかったんだ」

「大事を前にしているからこそ調べたのだ。同志の一人が敵の娘と通じているとなれば、我々の計画が事前に露見し粉砕する危険があるじゃないか」

俺は黙った。弁解の言葉はいくらでもあったが、それを口にする気にはなれなかった。俺はその時、既に安田の言う「我々」から自分がはずれていることに気づいていた。裏切り者としてはずされたのではない。自分の方から安田を見棄て、はずれた。安田を……突然友人としてではなく同志としてしか喋らなくなった男を。安田が、「それよりも何故、そんな重要な事を今まで俺たちに隠していたかだ」と訊いた。

安田ではなく他の奴が訊いたのかもしれない。だが俺は他の奴らのことは傍に居ることすら忘れていた。その座敷で、俺は十年間友人だった男とだけ対峙していた。

「だったらお前は俺に何も隠していないのか。お前はある芸者と関係をもつてもう長いこと夫人を裏切っている。しかも去年の秋ごろからはその芸者に逢うために新橋の『簀半』に日参するほどだということじゃないか……それをお前は俺に隠していないのか」

俺の声はあくまで静かだったが、その声が風でも起こして電灯が大きく揺らいだかのように、安田の顔にさっと影が流れた。「何故知っているんだ……」安田は不意に防禦にまわった顔でそう訊いた。

「奥さんから訊かされた……」

「保子が？ 保子は何も知らないはずだ」

「お前がそう思っているだけだ。奥さんは全部を知っている……」

安田は首を振ろうとし何かに思い当たったように再び顔色を変えた。だがそれは俺にはどうでもいいことだったし、安田にとってもそれは同じだった。安田はすぐに動揺を棄て、「あの女のことは何の関係もない。あの女は桂木の娘ではないし、牧山や小菅や黒波とも何の繋がりもない」次々に襲撃目標の閣僚たちの名を並べて言い、

「だがお前が逢っている娘が何も関係がないとは言わせない。桂木の娘なんだから」

厳格な声で言った。軍人に戻った顔には寸前の動揺の色は微塵もなかった。その意味で安田は立派な軍人だった。軍人としての道を全うし、そのためには妻も母親も、新橋の女も、そうして友人であるこの俺のことも簡単に切り棄てることのできる男だった。その点では俺とは違う男だった……安田は軍人の家に育ち、軍人が何かを知っており、幼い頃から軍人を志し、俺の方は群馬の貧しい農村の次男として生まれ、ちよっとした運命の悪戯で軍人になった男だった。同じ将校服をまといながらも、その下にある体が別々の色をしていること、田圃の泥や畑の瘦せた土を掴むために生まれてきた男の手と軍刀を握るために生まれてきた男の手とは決して繋ぎ合えるも

のではないこと、そのことに俺はつい最前、「この中に裏切り者がいる」安田がそう言い俺の顔に目を停めるまで気づかなかつたのだ……あの春の一日、士官学校の庭の花吹雪が舞い狂う中で、初めて安田の方から笑顔で声をかけてきた時から既に十年が過ぎたというのに……

桂木綾子のことでは実際、俺にはいろいろな言い訳があつた。俺が綾子と出逢つたのは全くの偶然だつたし、四度目に帝国ホテルで逢い、母親が縁談の話をもちだすまで、俺は綾子の父親が桂木謙太郎だとは知らなかつたのだ……愚かにも今年六十代半ばを迎える桂木にそんな若い妻と孫のような十八の娘がいるとはそれまで知らずにいたのだ……俺はそうと知って即刻にもホテルの食堂の席を立とうとした。だが何かが俺をとめた……それが何か鮮明には掴めないまま、俺はこの縁談を無下に断れば怪しまれるから恰好の断る口実が見つかるまで何日かの猶予がいる、そう考えた。「しかし、私は桂木閣下にお会いしたことはないし、閣下の方でも私のことなどご存知ないでしょう」そう尋ねると母親は細い眉の端を頬笑みで崩し、「この娘の結婚についてはすべて私に任されておりますの。いろいろな事情があつて……もちろん、あなたがこの縁談を真面目に考えてもいいと思われるのなら、一度父親にも会っていただきますが」と言った。「しかし……」俺はそれ以上の言葉を口にできなかつた。まさか、「我々はあなたのご主人でありこのお嬢さんの父親である一人の男を国のために近々殺すことになる」とは言えなかつた。そうしてその場でもその後も恰好な口実が見つからないまま、自分の方から訪ねてくるようになったその娘を拒みきれず部屋にあげたのだった……ただこの数日決起の機は熟してきていたし、そうなれば一刻も早くその娘との関係も断ち切っておかなければならなかつた。あの晩、安田の部屋で決起

……
の日は決まったなら翌日にも綾子とは無理矢理口実を作りだして別れるつもりでいた……だが

安田が「裏切り者」という言葉とともに俺の顔へと視線をとめた時、俺はふと自信を失くしたのだった。俺があの時帝国ホテルの席を立たなかったのは、桂木綾子が見せた目のせいではなかったのか。「娘があなたのような人に嫁ぎたいと、そんなことを申ししておりまして……」母親が切り出した言葉に一瞬羞（はじ）うように目を伏せ、だが次の瞬間には綾子はその目をあげ、俺を見つめてきた。三分咲きの花にも似たまだ無垢（むく）さや清楚さの方が勝った色白の顔の中でその瞳（ひとみ）だけが黒く熟（う）きつた実のように情熱（じやうねつ）を滴（た）らせていた……

俺はその目が怖くなったので、俺の方から目を逸（そ）らした。俺の軍服を剝（は）ぎ一人の男に変えてしまふような目だった。そうしてその目のせいではなかったのか、今月に入り決起の機が熟してきることがわかっていたのに俺がその娘を切り離すのを逡巡（しゆんじゆん）し続けていたのは……

あの安田の家の奥座敷で、無言の目がいつせいに「裏切り者」と罵（のの）しを浴びせる中で、俺はつまり自分が軍人であることに自信を失くしていたのだ。俺は軍人ではなく、国のために貧しい民のために維新を企てるほどの人物でもなく、国よりも一人の娘を選んだ一人の男なのだ……自分にそう言い聞かせようとしていたし、こいつらから外れていたのは今に始まったことではなく、士官学校の門を潜った時から俺は他の連中からは外れていたのだし、あの学校でも連隊でも自分の本場の場を見つけることはできずにいたのだと考えていた。俺の体は小刻みに震えていたが、それは怒りのせいではなかった。怒りが俺に襲（お）いかかってきたのは数分後、その家を出てか